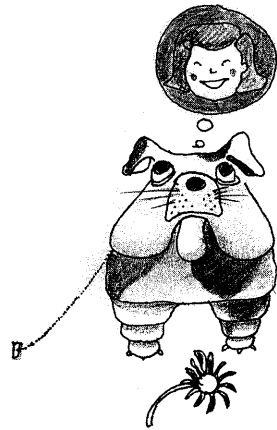


近ごろ感動したこと

松井 とし



園庭の隅に「しいの木」がある。ジャングルジムを覆うように枝を広げている。雨上がりの朝、たくさんのどんぐりが落ちた。前夜の風雨が吹き飛ばしたのだろう。

赤いプラスチック製の砂ふるいに、黙々とどんぐりを集めているのはK子。都会の小さな幼稚園の、ささやかな園庭の片隅に、キラッと「秋」が輝いて見えた。

この後、室内で子どもたちとトイレトペーパーをちぎって糊を混ぜ、紙粘土作りに興じた。K子も早々とうさぎの壁かけを作り終え、遊戯室へ出かけて行った。家の形の壁かけを作ったM子の窓枠に、さっきのどんぐりを分けてもらえないだろうか。K子に声をかけると、彼女は少しはにかみ、困ったような顔をしたが、「こっち」とテラスの花壇の横へ

案内してくれた。

どこへ行くのだろうかとついていった私を振り向き、K子が指さす先は何と、うさぎのピーターが毎日掘っている穴である。放してやると必ずここへ走ってきては忙しそうに前足を動かし、後ろ足の間からバツバと土をけちらし、また走っていく。そのピーターの穴の奥深く、つやつやと新鮮などんぐりがいっぱいつまっていた。

一瞬、K子の顔がリスの顔に見えた程、あまりにも思いがけず、また何ともほほえましく、私は高らかに笑った。K子はしっかりした子だが、口数は少なく、子どもらしいのびやかさに欠ける面がいつも気になっていたのであった。

翌朝K子に「ピーターが『僕の穴にそっとプレゼントを置いていってくれたのは誰だろう。』って喜んでいたわよ。」と声をかけると、にっこりほほえんだ。入園して半年、初めて見せてくれた安らぎの表情であった。

現実の世界とファンタジーの世界を行ったり来たりしながら、おさない子どもたちやうさぎたちと過ごす日々の中で、私はしばしば静かな感動に導かれる。

(神奈川県立教育センター)